

令和5年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第6号（10月予報）

令和5年9月26日 秋田県病害虫防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は10月を主とします。次回の発表は令和6年3月22日の予定です。 ◇農作物病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のウェブサイトでご覧いただけます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇農薬の再評価制度等により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のウェブサイトでご確認ください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関にご相談ください。 最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」でご確認ください。 https://pesticide.maff.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。 https://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

小麦	雪腐病の感染量は県中央部が平年並、県南部がやや少ないと予想されます。ほ場の排水対策を徹底し、今年の春季に発生が多かったほ場では、根雪直前に薬剤散布をしてください。
野菜・花き	ねぎ（秋冬どり）では、アザミウマ類（ネギアザミウマ）、シロイチモジヨトウ、キャベツ（秋冬どり）では、コナガ、モンシロチョウ、ヨトウガの発生量が多いと予想されます。発生初期から薬剤散布をしてください。 野菜・花き共通では、オオタバコガ、ハスモンヨトウの発生量が多いと予想されます。9月5日発表の防除対策情報第17号を参照し、防除対策を実施してください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
小麦	雪腐病	県中央部	—	—	平年並
		県南部			やや少ない
ねぎ (秋冬どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	さび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	べと病	全県	—	平年並	平年並
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	やや多い	多い
	シロイチモジヨトウ	全県	—	多い	多い
キャベツ (秋冬どり)	コナガ	全県	—	多い	多い
	モンシロチョウ	全県	—	多い	多い
	ヨトウガ(第2世代)	全県	—	やや多い	多い
野菜・花 き共通	オオタバコガ	全県	—	多い	多い
	ハスモンヨトウ	全県	—	多い	多い

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 小麦

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
1. 雪腐病	—	県中央部：平年並（前年並） 県南部：やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、東北地方寒候期予報によると12～2月の降雪量は平年並か少ないと予報されている（ /±）。
- イ、3～4月の巡回調査における葉腐れ・枯死面積率は県中央部が0.2%（平年1.7%）で平年並（ /±）、県南部が22.2%（平年29.2%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、早播、窒素肥料の多用、リン酸肥料の不足時に発生が多くなるので、適期の播種や適正な肥培管理に努める。
- イ、水田転作での栽培は、排水対策を徹底する。
- ウ、県内では雪腐小粒菌核病の発生が主体である。今年の春季に発生が多かったほ場では、根雪（平年の初日は秋田市12月5半旬、横手市12月2半旬）直前にシルバキュアフロアブル、バシタック水和剤75、フロンサイドSC、モンカット水和剤のいずれかを1回散布する。また、無人航空機で防除を行う場合は、根雪直前にシルバキュアフロアブルを散布する。
- エ、薬剤散布後、根雪までの期間が長かったり、多量の降雨があった場合は、再散布を行う（ただし、シルバキュアフロアブルの根雪前の使用回数は1回である）。
- オ、根雪期間が100日を超えると被害が著しくなるので、特に、根雪期間が長い県南部では、根雪直前の防除に努める。

B ねぎ（秋冬どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒斑病・葉枯病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、9月後半の巡回調査における発病株率は5.7%（平年11.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、本県における秋季の発生は、葉枯病が主である。葉枯病は収穫物の品質低下となる斑紋症状（黄色斑紋病斑）を引き起こすので、10月上旬までアミスター20フロアブル、テーク水和剤、パレード20フロアブル、カナメフロアブル、ダコニール1000を組み合わせ散布する。また、収穫前日数に注意して薬剤を選定する。
- イ、さび病などの病害や害虫による食害は、本病の発病を助長するため、他の病虫害の防除も合わせて行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. さび病	—	やや少ない（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、9月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年4.0%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病が多くなってからでは防除効果が劣るので、発病初期からオンリーワンフロアブル（RACコード：3）、カナメフロアブル（同：7）、アミスター20フロアブル（同：11）などを散布する。また、収穫前日数に注意して薬剤を選定する。

イ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. べと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、9月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早いので、発病が見られたらオロンディスウルトラSC（RACコード：49・30）、ザンプロDMフロアブル（同：45・40）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などを散布する。また、収穫前日数に注意して薬剤を選定する。

イ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが4、11、27、40、45、49の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. アザミウマ類（ネギアザミウマ）	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、9月後半の巡回調査における食害株率は60.2%（平年46.0%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル（同：34）、ベネビアOD（同：28）などを散布する。また、収穫前日数に注意して薬剤を選定する。

イ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. シロイチモジヨトウ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、9月後半の巡回調査における食害株率は25.0%（平年1.2%）で高かった（ /+）。
- ウ、防除適期決定ほ(2地点)における8月5半旬～9月4半旬のフェロモントラップの総誘殺数は3,154頭だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、9月5日発表の防除対策情報第17号を参照して防除する。
- イ、発生初期（若齢期）にアグロスリン乳剤（RACコード：3A）、カスケード乳剤（同：15）、ゼンターリ顆粒水和剤（同：11A）、ノーモルト乳剤（同：15）などを散布する。また、収穫前日数に注意して薬剤を選定する。

C キャベツ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. コナガ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は1.0頭（平年0.0頭）で多かった（ /+）。
- ウ、秋田市予察ほにおける9月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は28頭（平年7.5頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発生初期で幼虫の密度が低い間は、遅効性で残効の長い昆虫成長制御剤（IGR剤）（RACコード：30）又はBT剤（同：11）を散布する。
- イ、生育期から結球期にかけて発生が多くなってきたら、グレーシア乳剤（RACコード：30）、ブロフレアSC（同：30）、アフーム乳剤（同：6）、コテツフロアブル（同：13）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、ディアナSC（同：5）、トルネードエースDF（同：22A）、フェニックス顆粒水和剤（同：28）、プレバソンフロアブル5（同：28）などを散布する。なお、グレーシア乳剤、ブロフレアSC、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5は2週間程度の残効があるので、防除回数を減らすことができる。
- ウ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モンシロチョウ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.1頭（平年0.0頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヨトウガ (第2世代)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.09頭 (平年0.05頭) でやや多かった (/+)。

ウ、秋田市予察ほにおけるフェロモントラップの第1世代成虫の誘殺数は2頭 (平年2.8頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

イ、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

D 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. オオタバコガ	—	多い (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、防除適期決定ほ (3 地点) における9月1～4半旬のフェロモントラップの総誘殺数は289頭 (平年68.3頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、9月5日発表の防除対策情報第17号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. ハスモンヨトウ	—	多い (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、9月4半旬のキャベツの巡回調査における株当たり幼虫数は4.5頭 (平年0.1頭) で多かった (/+)。

ウ、防除適期決定ほ (2 地点) における9月1～4半旬のフェロモントラップの総誘殺数は5,557頭だった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、9月5日発表の防除対策情報第17号を参照して防除する。

IV. 気象予報

令和5年9月21日仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報（9月23日～10月22日）

（1）予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	10%	80%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

	低い	平年並	高い
9/23～9/29（1週目）	10%	10%	80%
9/30～10/6（2週目）	10%	10%	80%
10/7～10/20（3～4週目）	10%	30%	60%

令和5年9月19日仙台管区気象台発表 東北地方寒候期予報（12～2月）

（1）予報のポイント

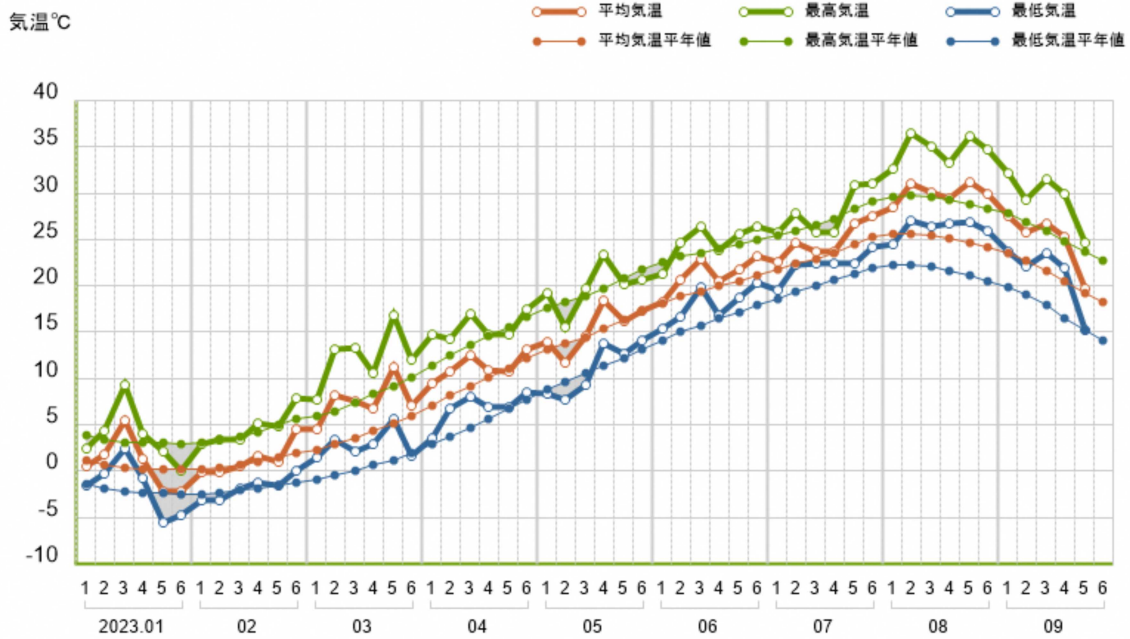
- ・ 冬型の気圧配置が弱く寒気の影響を受けにくいいため、冬の気温は平年並か高く、東北日本海側の降雪量は平年並か少ないでしょう。
- ・ 冬の降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

（2）冬（12～2月）の気温、降水量、降雪量の各階級の確率（東北日本海側）

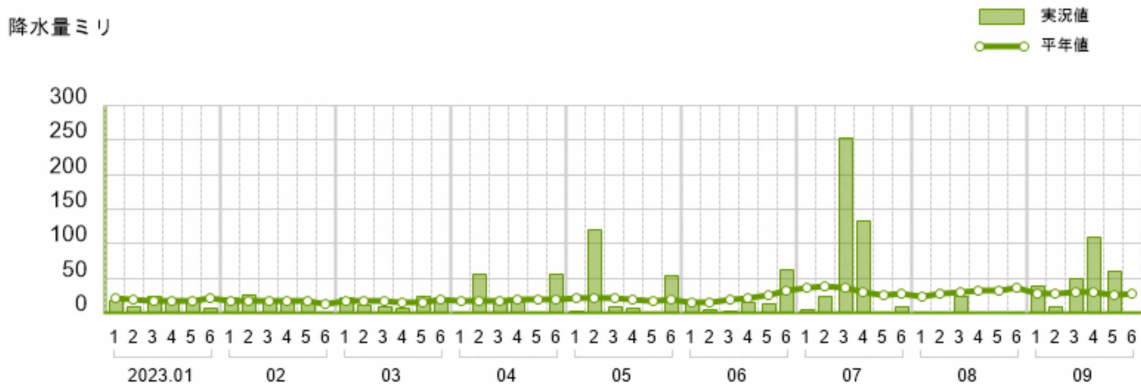
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	40%	40%
降水量	40%	30%	30%
降雪量	40%	40%	20%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～9月5半旬 秋田県農業気象システムより)

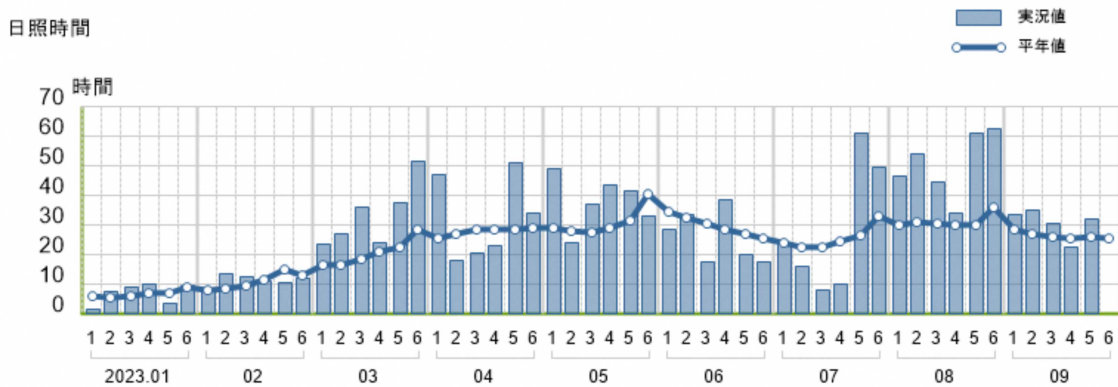
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。

- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。

- 農薬取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。